

参加者一覧	02
連作欄 8首の連作 自由詠.....	03
テーマ詠欄「朝」	14
一首評「そらよみ」.....	18
クロスワード	19
短歌リレーコラム「望遠鏡」	20
リレーエッセイ「いちごいちえ」	22
次回予告・編集後記	23

うた たそ 3 5

Utasona

2025.
January

no.

24

5



大橋 春人	@hachidx2	多 香 子	御 糸 さ ち	@MEATsachi
歌 島 孟	@Sinn1990	千 原 一 は ん	深 影 こ ー 八	@cotoha_mikage
片 羽 雲 雀	@anju92091554	な か ば ま ち う 子	水 上 歌 眠	@kamin_plz
廻 れ 井 戸	@kareido1111	中 村 成 志	南 の 島	@_nrkmm
河 岸 景 都	@kate_kawagishi	夏 野 ネ ー	衣 未	@mimi_4567
君 村 類	@kmmr_r09	西 淳 子	水 也	@m_ya_o
香 子	@kyoko_shogi	袴 田 朱 夏	宮 岡 り ょ う	@myao_rrr
久 保 田 毒 虫	@dokumu44	畑 依 裕	虫 武 一 俊	@mushitake
くろだたけし	@tkuro2016	薄 荷。	六 厥 め れ う	@mereumumai
高 野 蒔	@four70percent	ひ な お	村 田 一 広	@mucci2022
桜 咲	@0725pm01	平 本 文	森 内 詩 紋	@NJq4oEv95gCRpu
桜 さ く づ	@wJ59f8NwfuJvq3	廣 珍 堂	ヨ シ タ ジ ャ ッ ク	@jacksbeans2
Sand Pawns	@alen_ires	福 山 桃 歌		
西 鎮	@xi_zhen_ivUT	古 井 朔		
寿 司 村 マ イ ク	@xHksbNR4wv1wj8M	古 井 久 茂		
鈴 木 伊 奈	@5oMHbEdvUgZKxG	真 岡 ま な		
泳 二	@Ejshimada	ま さ け		
宇 祖 田 都 子	@Shimsyutu2020	松 本 直 哉		
h s	@hswelt			

計 58 名

たくさんのご参加
ありがとうございます！

連作欄 8首の連作 自由詠

#うたそう

煉獄より慈しみを込めて

新井きわ

亡くなれば燃えるだらうか父の歯のインプラントがしらしらと照る
夢に視たまんまに死はやつて来た ふつかり浮かぶ祭りの金魚
赤信号のピクトグラムいざ誘ふのやさしい声で「死んぢやええ」つて
タロットで生きてる意味をさがすなど 「Death」のカードのわれは常連
生きてゆく場所などはなし吾と君のまつ赤に染まるハザードマップ
「死なう」とか遠雷合図に口火切るくたんくたんな恋の終わりに
ゆつくりと廻る木馬に跨つて目が合う度に輪廻してゆく
雪山をアイゼンつかひ登りゆく一生であるよ夏も吹雪ぬ

Divorce

井倉りつ

ざらざらの日々 背を向けた少年は砂蹴飛ばして砂蹴飛ばして
「いつかなくなるような気がしてたから大丈夫だよ」紐のない靴
子供には大人のことはわからない大人はわからないふりをするから
駅のそばの公園はいつもうるさくて誰にも聞かれないよう歌う
もういない人からもらったものもある 硬い髪とかひらいた手とか
砂が目に入っただけだし 落ち葉踏みつけてがさが粉になるまで
過ぎるのを待つしかできないこともある 貨物列車の残す地響き
帰る、つて振り向いた顔は笑つて いいよ帰ろう。帰ろう帰ろう。

回想

石川順一

水餃子キットカットにスティックパン食べし日記し
自転車で買い物行かぬ川の土手階段降りて鯉を確かめ
鳳仙花名札が無くても分かる我「ソヨゴ」の名札は漢字で書かれ
回廊の下を通れば通る前黄色き花が灌木に咲き
バスケットボールは夜にやるなよと張り紙多き公園の隅
大賞の公募の年齢制限は自称だそうだ大いに悩む
卵黄のどろどろなれば剥き難きゆで卵剥くシンクの上で
ビール飲み鳥の鳴き声大きくて冬に生じるエサ不足かな

屋上獏部24

宇祖田都子

内外に階段があり そのどちらも屋上に達することはない
階段のない階段室はシロナガスクジラを立てておけるほど深い
キリンの頭が踊り場にあつてだいたいスクーターくらいの感じ
下り専用の階段しかなくて屋上からが国境の線
屋上で小さく光つてるのは骨？ それともやがて骨になるもの？
白黒だけで描ける獏の耳の先端の白が本当の白
右手親指の付け根に時間を感じる器官が育ってきたね
獏には上下はなく伝説もない それは地球のことかと問われチ・ガ・ウとだけ答える

おおつゝもりの午後

大橋春人

昨日からの雨の上がりて見渡せば青の深まる大晦日、午後
たったひとつの訃報を抱え混雑の讃岐うどんを啜っておりぬ
コンビ二の数よりうどん屋の多い香川にもんてきとるね君も
年越しそばならぬ年越しうどんなり私の五臓六腑がぬくい
老人はタバコを啜え青年はスマホを眺む それぞれの指
明日から三連休のスーパーをいつもと同じように訪う
ステーキを（それも定価の）買う人を少し羨ましい少しだけ
明日から何をしようか明日からいつも通りの今日がはじまる

揺れる星条旗とワタシ

歌島孟

ふるさとを遠く思えば、この街に行き交う鳥のような車よ
曇りない空には愛すべき国の誇りに旗がなびきだすのだ
見渡せば、まほろば囲む青垣の山さえなくて、迫る夕暮れ
午後九時に夕闇が来る平原にマーク・ロスコの縦の階調
グループに分かれて食を共にする。色とりどりのミックスサラダ
今日もまた乞食みたいに、残された食事を入れるバッグをもらう
ホームランボールを追つてゆく君の眼差しを受け止めてみせたい
外つ国の言葉に飽きて、僕たちは秘めごとみたく母語を話した

帰り花

片羽雲雀

積もりゆく雪の白さに会えぬ日の色を重ねて描いたきみの絵
包まれた細くて強い腕の中 世界で一番可愛いわたし
暗がりのうなじの影も襟足もまるではじめてみたいに触れる
温もりが冷めきるまでの余韻から抜け出すまでの花の牢獄
夢心地かた腕あげて眠る癖ちいさな棘の微かな痛み
約束のかわりに可愛いお揃いの傷をつけたらもっと愛しい
風花とともに舞い散る綺麗事「嫌い」が増える予感それでも
帰り道まちがいの種溢れてた春になつたらまた咲くでしょう

皿うどん

涸れ井戸

友達の小説に感化され小川洋子の『まぶた』を買った
短歌にて繋がっている友人の勧めでハン・ガンも買って来た
梅田まで本買うだけでやって来たついでにカレー食って帰るか
カレーより皿うどん屋が空いてたというだけで皿うどんに決める
読書会のための課題図書も買う紀伊國屋にて全てが揃う
喫茶店入るより電車の席が文庫を読むのには向いている
ドラえもんアイコンの月島さんが同期会行けるってラインを
夕焼けのうちに梅田から帰還バスに揺られてウトウトとする

氷点下でも

河岸景都

吸い込んだ空気が肺を冬にしてもう温かい嘘が吐けない
真つ直ぐに上を見るのは難しい澄んだ視界に散った星々
生き物がひとつもない白い道 最初に荒らす権利を持った
眼前に立つ冬の王 指先に通う熱さを信じていると
真つ黒なチエスターコートが語るのは氷点下でも花が咲くこと
消えていくものの積み重ね生きている雪解け水は海へと注ぐ
心まで凍らせまいと血は巡る季節は絶えず巡り続ける
拭つても拭つてもまた同じでも曇るガラスの向こうには春

翌日

君村類

体温でかたちをなくす結晶がけんかのは少しうらやましい
はじめから違う生き物だったことを確かめるために読むトーク履歴
指先が生み出す文字の読みやすさ嘘つきばかりおとなになって
委ねれば目的地へと着くバスの そのとおりに生きれないけど
ぴたりとした上着で町を行くひとのあふれる冬の冬らしさ
すぐ暮れていく日中をやり終えてもつともらしい仮面を剥いでいる
液晶の癖のない字が丁寧にマスキングすることからのこと
ごめんねをごめんなさいに打ち換える大人はなるよりはするもの

新横の駅で時刻表を見るこのレールの先、彼が居るんだ
棋士のまち加古川100面指しの秋にぎわう群れの一葉となる
君の住む街でなければ訪れぬ駅でクリスマスカード眺める
忘れ物した気がしても戻れないちよつと遠いね贅沢な場所
交わらぬはずの道だと知っている知っているから真つ直ぐ歩く
あの人の日常の姿知らぬまま私の時計は進み続ける
“控えめで物分かりよく淑やかに” 全部放つて爆走したい
朝方の白き空気に溶ける月わたしもここで消えてしまおう

自分自身

久保田毒虫

そういえばこんなニュースを聞きました秋が来たのに秋が来ないと
そういえばこんなニュースを聞きました冬が来たのに冬が来ないと
そういえばこんなニュースを聞きました君が君ではなくなったという
そういえばこんなニュースを聞きました僕が僕ではなくなったという
そういえばこんなニュースを聞きました誰かが君を探している
そういえばこんなニュースを聞きました誰かが僕を探していると
そういえばこんなニュースを聞きましたそれはちつとも見つからないと
誰し自分が自分自身を見失うそんなニュースを聞いた午後の日

これかうかじろ

くろだたけし

すりつぶし練りあげられたかまぼこの白さのような敬語で話す
表情がぎこちなければ怪しいし顔を隠すともっと怪しい
中か弱ばかりで強を見せぬまま壊れてしまう電気ストープ
この店が二十四時間営業と半年ぐらいして気がついた
カサカサに荒れた指でもわたしたとわかつてくれてスマホがひらく
(手続きで必要だから書きますが電話が好きじゃありません)
飛んできたテントウムシにとまられてそれは取り返しのつくまちがい
薄切りのハムではあるが三枚も食パンにのせこれからかじる

余白

高野蒔

丁寧になれるだろうか 珈琲の香りに包まれる台所
小さくて丸いかたちを挽くあいだキュートアグレッションを捧げる
鳥のため整えられる水入れに掬われて空が知る空の青
鳥瞰のインドネシアとエチオピア地図には雨は写っていない
透明な銀貨をそつと置いている丸くゆるめる湯を注ぐたびに
鳥籠に添わせる鶯の柔らかく話すこと話さなかったこと
開けたての豆が呟きだすまでを暖められてふくらむ時間
日曜を味わうような昼休み句点三つの返信を読む

週休二日

桜咲

目覚ましのベル鳴る前に深呼吸スーツゴミ出し今日は月曜
占いの1位信じて家を出るラッキーカラーの白い靴履く
七時発各駅停車で目の前の席が空いたら今日もシアワセ
悔しさをペダルに込めて登る坂半分だけの月がみている
待ちわびた金曜の朝雲高くあと十時間優等生でいる
サービスのトースト片手に動画見る土曜の朝の贅沢極めり
日曜の昼と夜とが混ざる空明日天気になあれと祈る
九時始業六時終業八時間明日のために今日も働く

アスファルト／芒野

西鎮

雨は雪にかわると言つて予報士は直喩のように冬を告げてく
あと一個あればよかった単一の乾電池から生まれた闇だ
お互いの唾液をゆるく交ぜてみる篠突く雨のサービスエリア
小夜時雨 朝には雪になるようにどうでもいいことばかり話して
オリーブを運んだ鳩の末裔がぼくを無視する三番ホーム
アスファルトにつぎつぎ融けてゆく雪を未来みたいにきみとみていた
陶器市ひやかしているこの朝もふたりの秘密なんだと思う
冬ざれの芒野ゆけば続編の撮られなかった映画の匂い

ツリー

桜さくら

ホテルにも光あふれて出張のわれら聖夜の旅人になる
いにしえの光る君らの宴席に盛られけるかなタグ付きの蟹
こつそりと持ちあわせたる別腹は蟹雑炊に満たされてゆく
友情の交わる果てを思いつつ電飾ツリーを同期と仰ぐ
研修の彷徨おえて天空のバーに師走の夜景ひろがる
感情がこぼれてしまうシャンパンを灯油のように注がれる夜
金色のオーナメントが揺れているこのひと年を濾過するように
クリスマスイブも彼岸もお花見も暦にありて日本にいいね

ボールチェーン

寿司村マイク

自転車を見つけ覗いた店内にコミックスを読み耽る襟足
鍵穴に刺さったままの根本からボールチェーンでぶら下がるクマ
瞬間のロックの後でクマ付きの鍵を握って足早に去る
DyDoの自販機横のゴミ箱の右目に放り込めば正しい
樽型のコーヒー缶のつめたゝいどうしてあたしだったのだろうか
〈鍵 切断〉検索すれば馬鹿デカイ工具はボルトクリップパーと知る
テディベアの列を見るだけシュタイフの公式ホームページは税込
空き缶の隙間にクマは引つ掛かり鍵は下まで落ちないはずだ

最後の試合

鈴木伊奈

初雪と涙をこらえる車内にはそれより冷たい核心がある
私の憧れだった才能に恵まれた人の弛まぬ努力は
君たちが教えてくれたひたむきに走ることとつかみ取ることも
えんじ色に袖を通して戦おう最後の試合を最高にしよう
伝えたい言葉を託した横断幕俺たちのヒーローエフドウ大好き
感謝だけがある年月は幸いだ光の中を進んで行けよ
引き際を委ねることは好きじゃない私の道は私が決めるよ
応援は伝わったかなヒーローに諦めない人若き選手よ

S (UNAYAMA) F 岡(生きてみて)

砂山ふうり

ともかくにも生きてみて理解した世界は青い現象である
忙しい時間に光るその人のその光景のその表情が
生まれ来て海と出会へたことを奇跡と思ふ夜明け夕焼け
このひとは何者なのと問うわれのこころを歩くティラノザウルス
絶妙の距離を保って太陽が文明社会観察してる
百万年前よりぼくの職業はこのみずうみの虹であること
花と月人類滅亡する日まできれいと言われ続ける役目
寄り添って雨を食むのかかたつむり世界がとけてゐるような庭

びゅんびゅん

たえなかず

意思是^{ゼロ}0実行力100性格は彗星深夜のコンビニびゅんびゅん
憎しみと愛と現実 そんなことよりあたし、今日ノーマイク
さもなくば、あなたの横に猫という猫を添わせて夜をつまびく
人類を愛するようにモーニングショー果てワンオペゼムを教わる
生物部一同ふたりの関係が進化するまで見守る所存
今日世界が最後だよってあのひとの逸らした瞳にある叙情のかけら
嫌なこと楽しいことが立ち代わり来るから人生マジ泣けるっす
バズってもひとり あなたの生き方も？ ばつとおんりい・のつとおるそう

巳年に蛇は

多香子

によると長虫は人に好かれねどゆったり春の日を浴びている
紫陽花の陰より白蛇するとでて神のお使い急ぎで通る
巳の年はお金の溜まる年という 財布にしまふ脱皮のかけら
チロチロと舌を出すのは悪い癖あの子の赤い嘘の口紅
しゅるしゅると蜘蛛の糸たぐり登り行く雲の上には光あふれよ
くるくると絵日傘回し春の日を踊っていたよ幼いあの日
色々なことを思えばだるいから恨みは裏のお瀬戸に捨てて
この年も良いことだけが起きるよう天神様に巳年の絵馬を

満ちる冬

千原こはぎ

毎日に冬の匂いが満ちていて冬だなあ、って何度も思う
おはようと言うとき笑うその顔が今日ゆいいつの笑顔だろうな
違和感の拭えないこと点々と降り積もるから見えづらくなる
「おいしい」のひとことを聞いたことがない無口ってそういうことだっけ
楽しいか楽しくないかわからない人に誘われ飲んでビール
駅からの夜道を急ぎ足でゆくオリオンもつと光ってほしい
会える人、会えない人と、ぜったいに逢えない人のいる冬銀河
おたがいのたつたひとりになるひとがいるんだろうかいまこの星に

どん詰まり

中村成志

薄雲の縁ぷちぷちと囁きいる大風あとの光の微動
見入る事魅入られること舞い人の背に草の原はるばると照る
いつのまに頬へ刷かれた擦り傷を玉藻前の柔毛とおもう
風に住む人たちだから今もお砂を彫りつづけている指だ
老猫の眼ばかり光る電柱へ爪のようなるぎりぎりの月
スマホを持たず夜道を歩くんだそうかどん詰まりにも月は照るのだ
ビール缶潰してひとつ息を吐く木霊、言霊、一人言、暮
父殺し子殺し化かし母ごろし神話の国も朝は寒くて

『バード・バーダー・バーデスト』より

西淳子

ボクたちに羽が生えたらかもしれない、かもしれないで飛ぶのだろうか
こうやって育ってきたの昼食に明るい失恋ソングを聞いて
雨粒もぼくにも跳ねる、跳ねる、跳ねるチャイムの音をかき消すように
星よりも神様よりも先にきみに夜にひっそりお願いごとを
ランデブー どこへいこうかどこへでもどこにもいけないここにしようよ
非日常はやってくる 日常という演奏を邪魔するように
先生のモノマネみたいなユーモアで宇宙人でさえ笑わせたいよ
僕たちはバード・バーダー・バーデスト ウロコで朝焼けを反射して

おれのオムライス

袴田朱夏

チキンライスは要はケチャップ炒飯で鶏がなければウィンナーでも可
卵がなくてもチキンライスで出せるから三合炊いて つくりすぎたな
料理本からふた手間を差し引いていいじゃんおれらしいオムライス
卵液に味塩コショウひと振りすこれは料理本のナイスひと手間
ふわふわのやつはお店で食べなさいおれの火力は薄皮式だ
薄皮のはだけてしまうオムライスおれが作れば子らは気にせず
おかわりを子らにはじめてせがまれるおれのオムライスこまではきた
オムライス焼きそばドリア炒飯とレパートリーは零汁零菜

指の温度

薄荷。

窓辺から漏れくるひかりの入射角世界は今日も華やいでいる
あの人に鼻歌まじりで誘われて小指の先がちよつとこきげん
夫婦にも見えないこともないのかもしれないあなたと囁るラーメン
雪の降る駐車場のすみっこでこっそりあなたと繋いだ小指
気付いたら撫でてしまっているくらい小指の先まで可愛いあなた
古傷を舐めあうように手を繋ぐ（こより先は誰も触れない）
コーヒーの香りに胸がざわついてこの傷はまだ熱をもっている
あの人の指の温度を思い出す雪の匂いの漂う夜に

自由律の歌 1

ひなお

蟬の声がぱったり途絶え代わりに虫が鳴きはじめた
荨麻疹で8年薬疹で10年母のアレルギー体質受け継ぐわれは
量子力学のゼロポイントフィールドはちよつと極楽に似ている
韓国は日本と一緒に大東亜戦争で敗北している 間違っではないけない
「丸」と云う雑誌を露店で買ったのが七十年つづく読書のはじめ
九条・多様性・LGBT・話し合い 綺麗ごとで済ますな と言いたい
天井のクモが蠅を待つように私も何かを待つ床に転がりながら
極暑だったがいきなりの秋 朝の歩道に涼しい風が吹いる

全身麻酔

廣珍堂

一と二は数へたはずだ、三はもう全身麻酔に時間さへなし
全身麻酔は冥土の隣とは知らざるままにサイン悪筆
麻酔科の医師が導く空間の灯芯にあるちひさき種火
切りたての肉、削りたての骨、血を、流して消した麻酔科の医師
朝焼けもゲリラ豪雨も夕焼けも探せぬままの全身麻酔
如何ほどのときを過ぎて戻りしや賽の河原の麻酔は覚めて
あのままであらなばそれは死でありき時間も闇も失ふもなし
来る家族あらねど麻酔手術終へ目覚むれば君のうるほふ瞳

ないものねだり

福山桃歌

暗闇は暗闇としてここにあるわたしの中の大きな空白
ともだちのように右手を繋いだら左手が空いてしまうから、だめ
どうしよう水が全然引かなくて滲んでしまう最後の手紙
また胸がちくちくしてるさよならは何度聞いてもさよならだった
手放したはずの感情だったのにきみが拾って抱えてしまった
きみからはこのままにも奪えない夜と夜とをなぞるだけでは
まやかしをほしがる指にふれて もう幕はすっかり下りたところで
ないものとしてしまいたくないきみとわたしのあいだにあるはずのもの

はぐれた羊

まさけ

始業時と同じ時刻の学校のベルと一緒に二度寝をしてる
起こされぬことが救いで苦しんで萎んだままの羽布団抱く
ふるふると胸を張ってる生卵こういう時もあったな 潰す
無言とは時に騒音真昼間につけたテレビがやはりうるさい
再建が進まぬダムを臍氣に見ているような休職期間
力なく落ちる枯葉の見る母の瞳に映る僕の水葬
ふと握り返した母の手のように小さく淡い色の秋桜
羊雲 群をはぐれてしまったただの羊だ仲間に入れて

小さな額

松本直哉

あづけたる園の電話にはせゆけばちひさき額に熱さまし貼る
おとなへど休診の札かかりをり熱のある子の手をひきかへる
頬あかく染めて無口になれる子のからだ寄せ来ぬ診察待つ間
やははだの熱く病む子にふれもみで医師の見入るは液晶画面
熱のあるときは二重のまぶたなる子をかなしみて氷をあてつ
せがまれて病む子に本をよみきかせよみをへぬ間にねむりにおちし
生きるとはいきをするこねむる子に頬ずりすれば息かすかなる
病める子にたべさせむとてやはらかくやはらかく煮るうどんうすあじ

ゲームをつくりながら短歌をつくる人

御糸さち

くり返しテストプレイをする夜にバグはうまれるスピカのように
友からのバグ報告を受けながらソース追うカーソルのゆらめき
つぶしてもつぶしてもバグ自分でもクリアできないゲームができた
マルチシナリオ そのいくつもの選択を間違えずに来た気がしないのよ
そっちはだめ×バッドエンドへ続く道 はじめてなのに知っててこわい
修正が不具合を生む 何歳になっても余計なお世話ばかりだ
たくなかった、な、って笑って言えたならそうなってしまっても良いのかも
何度でもやりなおせるよはじめから人さし指に白き引き金

Aquarium on weekday night

深影コトハ

小狡さを隠した大人であふれている平日夜の水族館は
ネクタイを外した君は水槽のなかのヒエラルキーを愛しむ
イルカショーを終えたイルカが揚々と引き上げてゆく定時退社で
水族館の暗いエリアで目が合った易者のような眼をした魚
ペンギンもアシカもコドモも本当はかわいいなんて思っていない
壁一面のクラゲが青く咲き出して重力のない言葉を交わす
舞踏会開演時刻シンデレラみたいにイカが光りはじめる
ゆらゆらと揺れる関係 休日家族の笑顔があふれる場所で

天使わいわい

水上歌眠

あしひきのスタバのカスタムわかんない傷の地層のようにしたいのに
みずいろのパーカー白いスニーカー空をとぶとき透明なのは
わたしには裏と表があるけれどどっちのわたしも深爪みたい
予定調和にのればただしく生きられるけどどうしてアルパカ白い
にんげんのやり方わからないせいでベンチの横に並んですわる
天使わいわい わたし天使は天使でも断罪とかする天使で泣いた
ほんものの天使のインスタ見つけたらコメントにたすけてつて書けるね
ほんとうに着たら体重軽くなる、みたいな服だけ着て歩こうよ

こだま

南の島

大阪へ行くのではなく帰るのだ毎時四十三分のこだま
煮魚と紛い芋の皮食べる祖父左の視界光の先へ
駐車場忘れる祖父と電話出ぬ祖母のはぐれる晦市場
約束も風呂も忘れてしまつてもともに美味しい記憶本物
大地揺らす地球に正月なんかない三百六十六分の一
もう何も起きるな世界幸せを願つたばかりの来年は今
□より○が並んだ方がいい二〇二五年の丸餅
来年も今年くらいのもんでいい誰もいなくなりませんように

映より

水也

箱庭で育つ私たちのひとつ空を仰いだちいさな背中
見果てぬ夢をみているの羽はある空は飛べない幼い羽が
醒めないでまださめないでまぼろしのように冷たい門の向こうは
いつだってそばにいたでしょ小指から伝わる愛があつたはずでしょ
向こう側行つてみたくて希望とかあたらしい朝きつとはじまる
ホログラムみたいだ指がすり抜ける虚ろな場所にこの手は届く
包み込む熱がいつしかざわついて一緒にって言えなかつたんだ
いつかまた会にくるからわたしたちひとつの鳥になれるはずだよ

門（こ）に立つる

六厥めれう

あの人と話したことになつているLINEの中のやり取りなのに
かさかさの右手どうしを差し出せばどちらからともなく静電気
三角の空き地のようにもらつても処分に困る感情がある
張り紙の「我がふり直せ」を「我が小川直也」と空目する繁忙期
擦りむいた膝のようだな肉まんの底のシートをゆつくり剥がす
曲名か歌手名なのかわからない歌番組に踊る横文字
くだらない望みはわりと叶うからそんなところで浪費する運
身の丈にあまる大吉なんかより持続させたい小吉の日々

香り立つ紅茶の破片

村田一広

地吹雪はトラックの荷台に渦巻いてにはか造りの雪像運ぶ
追憶が香りの粒で満たされるカップごと割れた紅茶の破片
月光がほどよくスライスをされるスケジュール帳の薄紙めくる
硬めに焼いたクッキーのやうな家を詰め込む冬の街を見おろす
ラザニアになつて眠りぬまんべんなく冬の陽のパウダーをまぶされ
おにぎりはあれで立派なお人形黒黒まとい海苔の召し物
猫の眼が押し寄せてくる路地裏の夜の導火線火花が散つた
鏡の中にも雪が降り積もり鏡の容量がすでに一杯

微熱風吹く街

森内詩紋

むせるほどヒトのおいの濃い街であなたのことをさがすだなんて
なにをしているんでしょうね私たち マジックアワーに電車が染まる
この空をあなたが好きだというのならもうクレパスは三色でいい
薄いやつ玉子ちくわぶあとトマト隣のあなただけイレギュラー
二杯目を飲んで試そうワルガラム相手になんてされないけれど
酔つてもロマンティックになりはせず近くて遠いあなたのうなじ
行かないと決まつてるから言えるのね「鷺谷はラブホばかり」と
送ろうとしないで上野で乗り換えて手を取れそうな顔をしないで

冬が、冬がはじまるよと、言わない

ヨシダジャック

冬近き森の手引書さまざまな動物たちの群れの呼び方
電柱に冬の広告見上げれば空いつぱいの架空ケーブル
図書館へ行く。折あしく時化もよう。波、タグボートは使えない
てのひらにゆびに油膜を光らせてきみは三月石鯛をつくる
人形劇の技を習得した夜に砂男に似た冬の来たれり
冬の街、辺り一面、路面電車が落としてゆく鏝
おそろしき詩形なるかな足元の冬のしつぽのはてなのかたち
冬の夕暮ればくの知らないうすやみとありとあらゆる友の来たれり



「朝」 テーマ詠

魂が今朝見た夢をごみ箱に入れてごみ箱ごと消した跡

◆ 麻数

まろやかな朝日にかつての真夜中の痛み失くして歩いてしまう

◆ 麻倉ゆえ

朝なさな始発列車で出会う君のリップひからす冬のたくらみ

◆ 新井きわ

冬の朝職場に向かう通りには口から抜けた白い魂

◆ 間玄

生きていかれんのはあんたのほうやきね ちったあ朝の陽でも浴びや

◆ 井倉りつ

朝に聞く鳥の鳴き声白の菊紫色に変わりつつあり

◆ 石川順一

吸血鬼朝日を浴びて死んでいく側溝に灰は吹き流されて

◆ 宇井モナミ

始発だから帰るというあなたにとってわたしはいつまで終電ですか

◆ 宇祖田都子

あなたには届かなくても少しずつ朝には動き出す言葉たち

◆ 泳二

新しい朝明日には忘れられる約束ばかり繰り返してる

◆ ls

ドラゴンの背を思わせてトラックは朝日に長い影を落とせる

◆ 歌島孟

張りついた孤独溶かした体温と二人の朝のやわらかな声

◆ 片羽雲雀

松の屋の朝定の安いとんかつ夜勤明けでも躊躇なくこれ

◆ 廻れ井戸

王朝が終わりを告げたような日に静かに含むココアが苦い

◆ 河岸景都

最初からこうなることは知っていて朝には消える月を見ている

◆ 君村類

朝が来る呼んでないのに朝が来る来てほしいのは貴方だけなの

◆ 久保田毒虫

夜勤明け沈み損ねた白い月始発を告げる踏切の音

◆ 桜咲

黴のにおい紙の臭いの箱をあけ顔を背けたほうにある朝

◆ Sand Pawns

晚白柚みたいな朝の月をみて孤独についてきみと話した

◆ 西鎮

朝井リョウの名を挙げきみが振り向いて僕を見つめるまで風、薫れ

◆ たえなかず

あたらしい朝 あたらしい年 なにも変われずひらく遮光カーテン

◆ 千原こはぎ

「おはよう」の「お」の字はほどよくにこやかに起きたてさんの機嫌を探る

◆ なかばまち子

外は陽が雪と垂れるころだろう顔の脂をあぶらで溶かす

◆ 中村成志

冬空の伽藍に息はよろこびて日の見える頃ふたつ重なる

◆ 夏野ネコ



ぬいぐるみのひとつひとつにはようのキスをしている歯科衛生士
子らすべて巣立ったあとは朝廷のようにあなたとゆっくりねむる
昼にしか通ったことのない道できみの手を取り初めての朝
つま先で歩道の氷を踏みぬけば朝の光が砕けてしまう

犬と散歩に出れば西空に月下界は昨日の夢から目覚める家々

目覚めたら寂しい朝が待っている昨日見た夢思い返して

東雲のなかに新聞配達員、豆腐屋、パン屋、高齢ガードマン

やがて朝に溶けだすだろう会いたさが今でも僕を走らせている

ゆつたりと迷ふことなく朝陽は昇る 昇れぬ私を地上に残して

気がつくと火をつけていた葉巻に告げる「決めました、今が朝です」

窓辺から白い光が入る部屋目覚めよりはやくあなたを想う

夏茶碗包み昨日の朝刊の命を一年永らえさせる

◆ 西淳子

◆ 袴田朱夏

◆ 畑 依裕

◆ 薄荷。

◆ ひなお

◆ 平本文

◆ 廣珍堂

◆ 福山桃歌

◆ 古井 朔

◆ 古井久茂

◆ 真岡まな

◆ まさけ

朝焼けはあんまり見ない たまに聞く人の名みたく澄んでて遠い

タイムマシンがまだあたたかい早朝のやけに整頓されたりビング

あかつきに雲はおなかをひかせて手を入れたなら温いだろうか

朝を抜く気分次第で昼も抜く正しい人にいつかなるんだ

餌ねだるパンチで今朝も起こされて老猫のため降りる階段

朝焼けを夢に見るまで終わらない 誰もいなくなった遊園地

新居にはカーテンつけてくれますか 朝は知らぬ間に来るほうがいい

失敗の自分のひとりが宿直の仮眠ののちの朝焼けを浴ぶ

お目覚めはもはやま昼間朝に飲むべき錠剤が宙に浮いてる

まぶしいね埠頭の朝日忘れずにいるよシャッターきる横顔を

コロ、モネ、ターナー、ピサロ 消えてまた別のところに現れる朝

◆ 御糸さち

◆ 深影コトハ

◆ 水上歌眠

◆ 南の島

◆ 衣未

◆ 水也

◆ 宮岡りょう

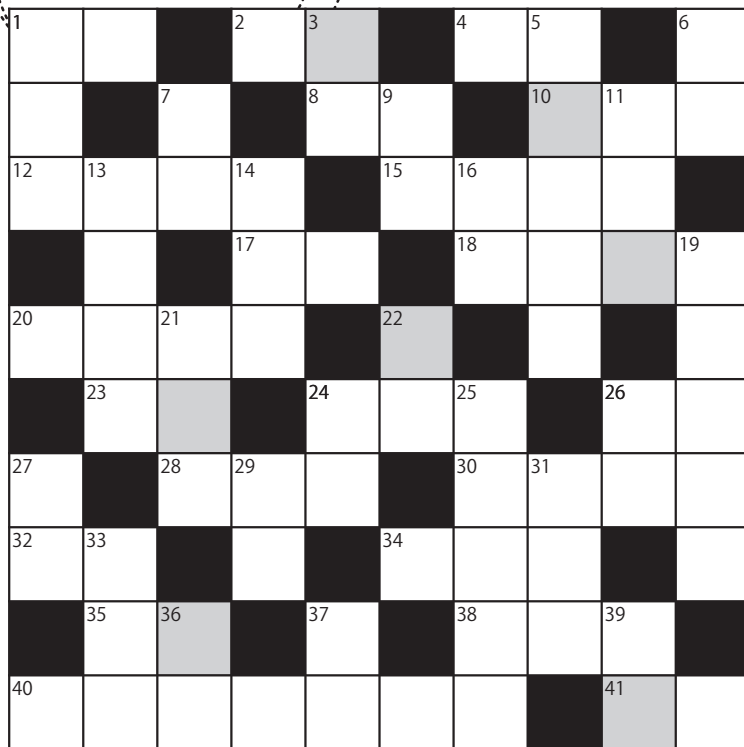
◆ 虫武一俊

◆ 村田一広

◆ 森内詩紋

◆ ヨシダジャック

クロスワード



タテのかぎ

- 1 安価で庶民的なお菓子
3 土地がくぼんでいて、水のたまった所
5 客が来たときに通す部屋
6 こがね、おうごん
7 「オレが今マリオなんだよ」○○に来て
子はゲーム機に触れなくなりぬ
／ 倭万智
9 田舎。生まれ育ったところ。「○○帰リ」
11 メーカーによって定められた価格
13 勝ち負け
14 いつもとはちがうこと
16 ○○を洗はば○○のたまひ冴ゆる
まで人戀はば人あやむるころ
／ 塚本邦雄
19 自動車やオートバイなどの競走用につくられた環状の道路
21 放送局が出した電波を音声に変える

機械。「〇〇〇体操」

- 22 くれなゐの二尺伸びたる薔薇の芽の
針やはらかに春雨のふる／正岡子規
24 光源氏の死後の物語で薫大将を主人
公とした「○○十帖」
25 売り払うこと
26 多めの水で米を柔らかく炊いたもの
27 暑いときや運動したときに皮膚から
出る水分
29 錆びてゆく廃車の○○のミラーたち
いっせいに空映せ十月／穂村弘
31 言葉を集め、発音・表記・意味など
を説明した本
33 その大ききより小さいこと
36 目ざすところ。だいたいの見当。
37 物事の規模や勢いなどが、終わりに
近づくにつれて段々と小さくなった
弱まったりすること＝○○すばみ
39 初谷むい第一歌集『花は泡、そこに
○○って会○○いよ』



ヨコのかぎ

- 1 ○○からも愛されないとい
 いうことの自由気ままを誇
 りつつ咲け / 柊野浩一
 2 野球で走者が得点するた
 めに通過する地点
 4 海水や地中からとれる白く
 て辛い物
 8 今日の朝
 10 雨降り空
 12 動物のようなかぶり物をし
 て、豊年を祈り、また悪
 魔祓として舞う
 15 まとまりのあること。
 「——のとれたチーム」。
 17 金額などを自動的に計算
 して記録する機械
 18 まつぶっくりの別名
 20 やってくること
 23 悪いことなどが起こらない
 さま
 24 品物などを販売する場所
 26 浅い海の岩につく二枚貝。
 養殖もされる。
 28 地震、雷、火事、○○○
 30 傷や病気をなおす技術
 32 夏の昆虫。声が大きい。
 34 相撲取り
 35 節分時に撒くもの
 38 3月の別名
 40 物事の活動を起こす力
 41 今年の干支

一首評

ヨシダジャック

秋、誰もが林檎を詠まずにいられない。可憐な形。秋の直喻のような味わい。そして赤。この魅力に抗えるだろうか？しかし作者は少し異なる主張をする。いけないりんごを書き、罪なきりんごを書き直し、すぐに血の色に林檎を重ねる。ねえ無理に林檎断ちをするのはよせとアドバイスしてあげたい。また秋になればこの赤はきみの前に現れてくるのだから。アンリ・マテイス、三岸節子、サム・フランシス、消えてまた別のところに現れる赤

本条惠

一首評

中村成志

二度寝のち昼寝はかどる休日。秋のはるけき天球儀澄む

袴田朱夏

夜にすっかり寝たのち午前中に寝て真昼間も寝る。「はかどる」と言うからには、うたた寝程度ではなくしっかりと熟睡しているのだらう。そんな秋の休日。屋外では澄み渡った空気の中、天球儀のごとく世界がはるかに膨らんでいく。しかし主人公は（なにしる寝ているので）それを見ることはない。ただ、眠りの中でその気配を感じとるのみだ。

はるけきの「はる」が微妙に「秋」と呼応していて、自然な可笑しさを生んでいる。

袴田 朱夏

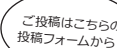
「そらよみ」一首評募集

前号の「うたそら」からあなたのお気に入りの一首を引用し、その歌について200文字以内でお書きください。お一人につき一首まで。

ご自分の短歌ではなく、他の方の作品でお願いいたします。

公序良俗に反するもの、作者や他人の人格を傷つけるような投稿は掲載できませんのでご注意ください。

ご投稿はこちらの投稿フォームから



一首評

古井久茂

冬眠のリスを起こしてゆくように給食ワゴンを鳴らして進む

松浦やも

音も振動もなくとも、リスは冬眠から目覚める。そんなリスに対してただ「起こす」とあるのですから、本当に目覚める程度の最小限なのでしょう。それはきつと優しい。とても優しい。けれど、そんな静かに給食ワゴンと進むのはどこなのでしょう。「冬眠」という言葉と合わさって、少し死の匂いもします。そんな静かなやわらかさを感じる歌でした。

松浦 也 也

常夏の国の木々にはないという年輪　これは冬を知る木だ

本条恵

本条惠

一首評

西鎮

前号の「うたそら」から
気になった一首をとりあげて
200文字くらいで語る

一首評
そらよみ

告知

短歌ラボ

実験的
短歌
ワークショップ

新しい短歌のワークショップがはじまります。はじめて作る人から日頃短歌を作っている人、ベテランさんまで、どなたでもめいっぱい楽しめる実験的な短歌の場を目指します。全6回、きっと全部楽しい！ぜひ一緒に、短歌でわくわくしませんか？

全6回
すべてご参加いただいても興味のある回のみのご参加でもOKです

定員 8名
各回

参加費
各回 **700円**

研究員
うし りゅう すけ
牛隆佑
千原こはぎ

会場
JR草津駅近辺
@滋賀

第1回
短歌のマジカルラーニング
小説の書き出しから短歌を作ってみよう。はじめて作る人にも！
2024年 **終了**
11/30 (土)
対象: はじめて作る人 作ったことある人

第2回
短歌のワンダーマテリアルとは
なんでもないところから自分だけの詩情を見つけ出せ！
2024年 **終了**
12/28 (土)
対象: はじめて作る人 作ったことある人

第3回
短歌のカラフルバリエーション
短歌の展開がワンパターン？カギは「接続詞」だ！
2025年 **満員**
1/25 (土)
対象: 作ったことある人

第4回
短歌のマジカルラーニング2
小説の書き出しから短歌を作ってみよう。はじめて作る人にも！
2025年
2/22 (土)
対象: はじめて作る人 作ったことある人

第5回
口語短歌のためのネオ文語研究
文語を知ることの可能性を広げよう！ 口語短歌を作る人に。
2025年
3/29 (土)
対象: 作ったことある人

第6回
短歌のセオリーをぶち壊そう
短歌のセオリーはなぜセオリーなのか？ 学んで壊せ！
2025年
4/26 (土)
対象: 作ったことある人

ご質問等は、X(旧 Twitter)の牛隆佑(@ushiryu31)、千原こはぎ(@kohagi_tw)までDMにてお問い合わせください。

主催: 千原こはぎ | <https://tankalab.wixsite.com/info>

詳細、お申し込み等は
こちらのサイトから！



短歌リーディング

望遠鏡

24

短歌にまつわるあれこれについて
自由きままに書くページ
今号のテーマと書き手さんは…



書き手

暗い部屋で

テーマ

失恋中に泣いた短歌

二〇二三年の冬に、デカい失恋をしました。あまり物を食べられず、会社も休みがちになるという有様。そんな時期に、読んでいて思わず泣いてしまった短歌を紹介します。

だから世界を愛しているよ 花器として余談の日々をつつくしくゆく
／初谷むい『わたしの嫌いな桃源郷』

読後すぐに胸が熱くなって、頭もキーンと引き締まった記憶があります。歌集では相手の喪失を思わせる章中に登場するため、純

粋に失恋詠として受け取ることができます。

なんだろうなあ、まず「花器」というところから見て、自分が「花」ではないんですよ。もしかしたら相手が「花」なのかもしれないし、新たな可能性を「花」としているのかもしれないけれど、自分は容れ物ではない。そのうえ、これからの人生を「余談の日々」と言ってしまうところも切ないです。しかし、何よりこの歌の最もインパクトのある点は「だから世界を愛しているよ」だと思います。「それでも」ではなくて「だから」。ここに自身の存在への、人生への強い肯定が込められているような気がするんです。これからの日々がたとえ余談であったとしても、世界への愛を抱いて生きていこうという意思があり、失恋中だからこそ、より強く惹きつけられた短歌です。

あなたとね、一緒にいるとね、楽しいね。今日は天気がいい日だしね。しね／のすたる

この短歌、すごく自然に「しね」という言葉に繋がります。独占欲とか、感情の裏返しとか、「しね」の理由はさまざまだと思いますが、いずれにせよ、幸福な日常のなかに潜んでいる不安定さが巧みに提示された歌だと思うんですね。文章の全体意としてもそう

し、前向きな文章の中に「しね」という文字が隠されているという視覚的な構造自体もそれを感じさせます。明るいはずの生活においてつい抱いてしまう影の部分、これがとても当時のわたしのハートを刺激した記憶があります。

また、この歌はわたしのイメージでは割と早口。相手とは触れ合わずに、自分だけで言い切ってしまうような感覚がありました。恋愛は相手と心を交わしているようで、とても個人的で閉鎖的なものでもあります。自分のなかで勝手に相手の像を膨らませて、勝手に何かを願っている。そんな個性を強く感じさせられる歌だから、なんだか上手いかない恋の「独りよがり感」を突きつけてくるような気がしました。この破壊力、改めて大好きです。

他にもたくさんあるのですが、以上二首がわたしの紹介したい「失恋中に泣いた短歌」でした。けれどもう失恋をしないようにしたいですね。



ご感想は
こちらまで!

Twitter(現X)
ハッシュタグ
#うたそら

「うたそら」では Twitter(現X) での感想をお待ちしております。ハッシュタグ「#うたそら」をつけて、お読みになった感想をぜひお聞かせください。

次号予告

連作欄 8首の連作 自由詠
テーマ詠欄 「4」
一首評「そらよみ」
短歌リレーコラム「望遠鏡」
リレーエッセイ「いちごいちえ」

第25号

短歌募集

第25号 25 2/28(金) 24時

8首の連作 自由詠 テーマ詠「4」 1首

第26号 25 4/30(水) 24時

8首の連作 自由詠 テーマ詠「休」 1首

投稿先等、詳しくはうたそらのご案内ページをご覧ください
<http://kohagiuta.com/utasora/>

編集後記

新しい年がやってまいりました。すてきな
正月をお過ごしでしょうか。皆さま、本年も短
歌誌「うたそら」をどうぞよろしくお願いいた
します。この一年も皆さんにとって楽しいこと
がいろいろあったと思います。
今年も大晦日が締め切りでしたが、お忙し
いところたくさん作品をお寄せい
ただきました。おなじみのクロスワ
ードパズルもご用意しております。ど
うかじっくりゆっくりお楽しみいた
だけましたら幸いです。
次号で「うたそら」は丸4周年を
迎え、5年目に入ります。テーマ詠
のお題は「4」です。たくさんの方
の作品をお待ちしております！

編集鳥 千原こはぎ

今号のうたそら

参加歌人様 58名

連作欄 41名

テーマ詠欄 47名

一首評 4名

コラム 暗い部屋で さん

エッセイ 松下誠一 さん

第24号

ご寄稿いただき
ありがとうございました！

2025



illustration: kohagi chihara

マンションの吉番館と式番館を子どものころは行き来していた

松下誠一



運転免許は持っているけれど、あまり運転する機会はない。都内に住んでいて電車であらかた足りるというのもあるけれど、単に車を運転するのにまだ慣れていない。自分の身体より大きいものを操作することにすこし抵抗感がある。実家に住んでいて親のデミオを借りることはできるが、借りてまで運転しようと思わない。なにか用事があったり友だちに頼まれてやつと運転する気になる。
免許を取りたての十九歳のころ友だちを迎えに池袋に向かったことがある。そのときに道を間違えてしまつて川越街道から路地へ路

地へ、より細い路地へと迷い込んでしまい、中池袋公園のあたりまで車で入ってしまった。運転初心者だった僕は入ってしまったいいのか分からない知らない道の怖さと、なに車でここまで来てんだよという池袋のひとたちが送ってくる視線にテンパってしまった。一度落ち着こうと目についたパーキングエリアに入ろうと思った。そこは池袋の狭い土地にL字になっているパーキングエリアで、そのうえデミオよりも高そうな黒い車が止まっていた、気付いたころには戻るのもむずかしくなつて、うまい人がつかうテトリスのむらさき色みたいに狭いパーキングエリアをうねうねしていた。結局友だちにパーキングエリアまで来てもらつて、パーキングエリアをでるところまで友だちをお願いして、その日はおとなしく板橋区に帰った。
パーキングエリアをテーマに書くことが本当にないので、近況をすこし書くと思う。このエッセイの原稿を書いているのはクリスマススイブの二十二時。すっかりバ切を忘れていたまま四日が経っていた。僕は夜学に通っていてクリスマススイブの今日まで試験があつ

て年明けにまだいくつか試験がある。なので気分的にはクリスマスどころではない。実際、クリスマスプレゼントが枕元に置かれることもなく、イルミネーションを見におでかけをするなんてこともないので、ただの火曜日って感じた。クリスマスが一番古い記憶を思い返すと、幼稚園のときにポケモンのダイヤモンドを買ってもらった気がする。そのころはクリスマスの何日も前からそわそわしていたはずなのに、なくなつていく感覚があることにすこし落ち込んでしまう。そんなの数え始めたらもつとたくさんあるはずなんだけど、クリスマスには特別そうという思いが強くなる。パーキングエリアではじまつてクリスマスの思い出で終わつてしまつて申し訳ないのだけれど、生きていたらそんなこともあります。

24

リレーエッセイ

いちごいちえ

前号の人の短歌から一語を摘んでそれをテーマにエッセイを書くページ
今号のテーマと書き手さんは…

テーマ パーキングエリア
書き手 松下誠一



うたそら 第24号

発行：2025.01.02

編集・制作：千原こはぎ

@kohagi_tw <http://kohagiuta.com/utasora/>